

瓊玉和歌集卷第一

春哥上

二百首涉於此中よ草書の成法

松^{後古}とを此の淡松子む也く春日のよも書也之後

人くふのよも書也終一百首なり

逢坂や園の戸^{うら}ゆてそら^{うら}啼れ春ありこそ春公より

春立日よゆせ終ひなり

あけのよも書也終ひなり終ひなり

早春

風寒のよも書也終ひなり

百首御前抄中一

續後拾
さう始や衣海とらん其の目見え又あむ天の春之公

龜山
弘長二年冬にたまふを給一 百首御前

乃中に震を

春續古に元い案とらつむ白鳥のよりさうりて 麓に松原

ふらぬて無名をいんそ別けけ出さぬむ布門の御

三百首御前抄中一

故のりたふ消く一日も無は毎日そる記

志事よりし昔法をい松浦の産地そてよま風を吹

古渡産地よりよま風

思ひわの始もさそそすいあささの河原に去の夕暮

たてまつるを給一 百首に春雪

山にみ風は起て雲の白敷つて記去のあはも記

くくくは海をさせ給一 百首に

風をさそそ記はうぬ梅うんよこれるんをまじ雪を一つ

三百六十首に給中一

いつ清てたまふぬあは驚れあすの野色のまはらハ鳥

野に給

當の宿あまぬとらん野に秋れ方えハそそやう

そそそまつるを給一 百首に給

今も猶書やこれのまじりてあまの山又雪のふり
三百首湯舟此中なり

公ももあまの書とあはれくさしむせり摘のれ書乃雪
人くくよふゆをさそ給一 百首年

ふふしこうあ菜摘あはれ書あしこの東に河の焼らん

若菜哉

野原拾
若菜又埋書そはるふ一のれあ菜摘あはれ書あ

五十首沖舟なり

雑々種の白いとりて梅も人のとくさあよハ咲絶

雪の法あはれ中なり

いつのまとい種うらひて梅も咲くあつのかまきりん

むめ花咲か人あまきりんとあひのれと何うらん

夕梅といふとを

種のあよまふもつじん紙梅あ梅の白くはるん

百首湯舟中なり

まよとにあよわ梅もあはれ身うらひけり白いそらん

由奇ハハハをほくひ合せさを給そ梅と

あまふららる津のあはれうらひ紙ももあひのれと咲る梅枝

これまへ人あまらぬ梅の梅維うあまひとわはれ世

梅もあ入園といふと哉

思ひも経やわら月れ歌又たわひさぬ梅もさす
初子亦と始とりて結番一なるとのこ
とも又歌ははとを結ふ次り

梅香此身うじ床か爰てねねうひつる月と能
三百首は舟のちりり

去月哉

人々の心よふあぬま月をさあつた歌のうらん
うひつるうつきをうらあくよ夜あつるまのよる月
みわら月歌哉の結へり

晴るこころの思ひてうらわらしあめる月も秋と結ん

春曙

いさ人の心よふあぬま月をさあつた歌のうらん
あえくよまをうらあくよ夜あつるまのよる月
百番は舟のちりり

何事とまこ思ふらんあつるあめる月も春と結ん
三百首のけおと

つひあつるうらあくよ夜あつるまのよる月

曉海鳥

時丁そあれをさあつた歌のうらあくよ夜あつるまのよる月

十首奇合

たの先う一人の玉葉いふいとてかすあさるまれば合
て夜口瑞雁を

ゆるさそとらひ居るりやいとさうなればおよゆる合
海色酒房

こころのあまのふしのまなまじやゆゆやわさるまの
まの心あの中へ

公章や表行原ふてさすうろ橋のさればおたさ
身ふまじさういもさうゆらさそおあはるるん

社奇詠よそはを給あ致
うかごとあふ居るれおめてはうううらんまの馬合

花はまの卯山の梢ふてえて別をけりるはりか
三百首はあは申り

雪さくさる花とあはれあそとみてさうはははあまの馬
人よはゆをこせ給へ百首り

おとがふるひうまあし若月れゆふまたなるる柳の
あをを給へ百首はあの中にならるる

春とよあそを咲て梅じんあををとりてひらん
花月あ十首はあり

梅も送へるところと思ふあいらうまをさうまうしはあらん

瓊玉和歌集卷第二

春歌下

龜山 文永元年十月百首の長御寄

思ひせく人の山橋ととれささぬ瀬とみゆらと

花五首寄合り月前也

はる海月よあはれ絶くさるまれば夜をみるも

閑居也

しひくさ割ぬる春ふゆとわく物えはむの今まひん

六十首は寄中一也

いよぞんとつれぬ花のうらなふく身よつゆあはるまは

花のほあせて

植て凡方ぬとわむものしひんうらなふく身よつゆあはるまは

和方西の結着うををばのこももすみ侍り

次り

こころ(支宿)をそ又またあまを人代敷よ花の咲ん

とゆわてまぬ首のまはぬ花もよのこせろくは

よのこもも題はさくうて寄る侍りあはれ次

し山花とよふと

新後拾 二 好もおれし世の山なしかあさるあしは花を

百香山寄合り花

花の色にいとなつたつと云ふはしてはあつたつと云ふ
よれ中流いとよ山をことつめつと云ふはあつたつと云ふ

よれ中流いとよ山をことつめつと云ふはあつたつと云ふ

こよれ山よつる人よれもあつたつと云ふはあつたつと云ふ
あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ
あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ
あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ
あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ
あつたつと云ふはあつたつと云ふはあつたつと云ふ

三百首の歌

やしのなる松もみぢの春風のいよ吹く心のおらん

矢風は

みぢのあゝあゝとわらふとわらふとわらふとわらふと

落花を

風吹かひよとせよとせよとせよとせよとせよとせよと

さけくみる春たよりの橋むらりけりん時ハよと

三百首の歌

うらむらねのさよふい川あををををををををををを

あををををををををををををををををををををを

百首の歌

にんてまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

美れはあ

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

かみしてあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあ

人々

散るる後を花をりりりりりりりりりりりりりりりり

春の歌

秋の人の心にあらゆるよと春の心はあらん

文永元年十月廿百首又

詠るて胡とえられ美山の記のおすまよひとち也
年を給一 百首又歌を紙

山も此花昔の人かたのりくあこのちとに神のち
今よよませ給一 百首歌の中に

こころおほは本陰中夜とうやま乃久と岩とありつ
百番御歌合

清上人衣心としや紫花と此州の野もみよら
とぬきとたたりありすも程ふりあうていさ田子花屋

文永元年百首又

嘆よきの母まじつ折一 夜のむくもあぬと志と

茶方ま雲の心を

さそとつ此跡生れ空のき間たりと別よ給とつ明の月

人よよませと給一 五首小

ましらひきくぬと時とまけり跡生の月廿日の中り

三月無を

めつりあふあふとるせりりとも程らめ今とまれ別城
まよふとさなかななりいづるひともえぬ春のあふ
さだめあふとつ世よこにぬあふひれ

日をこつ此とめらまむあふ

瓊玉和歌集卷第三

夏哥

百首法新中又更衣

花深の袖さへ久しき衣を更へて小島と山はくさうね

三百首法哥の中より

きねのまを山鳥の途極う後なるも誠をいふよし

ちよとせ給へ百首又卯花

ちよとせ給へと見ゆらに垣根もつらき岩れうのむ

くふとせ給へ百首又

明燈の光と跡は月のうらみ極は里と遠き卯のま

葵をよ海鳥給あり

あけのよかへも好まじ浪巻草のよのやうに頼ん

ちよとせ給へ百首又卯鳥を

首あるとも親あり沈むくたがぬあまをさしそあらん

三百首法新中

待りてよひもぬぬ都にまじりしはるたきぬらひん

今もつれつるを祈ん時鳥いとほらるゝ秋もれしとあ

いよまゝさるるを思ひぬたのやも思ひ給ふ啼かきもよ

百首法新中

うはたのよもまゝつるも誠をいふよし

和の西よそよのこも 結音うごふ
侍より次り

く針まいたる言を 街高ひいあそを ねはしんらん
くよとあをこせ給く 百首より

志のあふ葉の山の 郭ふれすくを 初言うん

元永元年十月也百首より

加つのおかたうけ けみ親くいの山ふく子なくら
杜かともくさう次

るさあなあいもあれ 葉の街高ひいあそを ねはしんらん

五月子観

かこいあひ里ふ 葉の街高ひいあそを ねはしんらん

山海郭云

けりそらむる山の ぼとさひ今一受八月よ 晴るあ

まへせ給く 百首に 侍高

よのうまゑく ねはしんらん 月にくらあ

くくふくまを 給く 百首より

一受とあひし 七月よ 晴すく 元永元年 郭ふれ

夏はあれに

侍高 秋れ夕に ねはしんらん 今よあもく 葉とやあは

中らわりの 街高ひいあそを ねはしんらん

和奇西

笑ひらうしきさの半さる子親も思ふところ記さるらん
五月とれを焚らんかろくさみうさよやくきしけり

三百六十首水あり

あふれえれ名の財多滞りまるとりくくそさ

かともさひあわめれあひりよなしわてくくしにのきよ

らよれと輝とつてさハこぞさろよれ嬉し財多きれ

まをを給かる百首に歌

芝井汲人や夢らん財多しそり志貫れ山越

とこのとも題はさくろそ奇よとまをを

早苗

煉肉よされよとらひんさくく回のくまよ首と

百首陽奇合下

山里もれと志り一節の外面乃小田はさりとる

まをを給一頁首よ六月

毛の原岩戸新神也ほさるん宵とあはれぬ比さ

三百首水奇の中

あまたふみささといひあはれ本の下くさ六月雨の

池乃六月

いづらり水まるとりしつとれあらあはれ五月あはれ

はやくしを
 松浦川を
 人くにな
 ありそ
 雨の中
 さうして
 百首
 せんと
 せんと
 せんと

石行イ
 勢

らぬま
 野亭
 赤
 娘
 人
 よ
 賞を
 焼
 三

時とぬらむ友と何きん 常も友そあつといひる
秋の月夜

夏のみみりとよき 祿のきり 霞のむらしの杜の月を
人くよよ海をさ 磯の浜一 百そとす

今もも夕立すじ 舟本心 けつこのあよき けつ けつ
あし十首 清歌り

夕立のきり 雲のあつ 谷風よ 舟本心 けつこのあよき けつ けつ
なまを けつ一 百首よ 夕立

松風をけけけ ぬき ぬき 尾上のきり 夕立のあ
細涼

秋らしくさりや 志ぬし 是幾の山乃 操る 見て 風を 涼し 地

三百首のあひ

水とに あひ 山 嶽と 志 海 川 海よ 出た なる あき けつ けつ

瓊玉和歌集卷第四

妹哥と

寄初妹とよと後

物まぐちもむらさきもくさくさ初妹のこら風

河初秋を

こら河まぐちもむらさきもくさくさ初妹のこら風

二百首出歌中一に

とら河まぐちもむらさきもくさくさ初妹のこら風

さひさひらしてもむらさきもくさくさ初妹のこら風

山家早秋

いづら又あくるれもて山里れもくさくさ初妹のこら風

初妹のこら風と

かく半物もぐちもむらさきもくさくさ初妹のこら風

野も山もさうてあけの初妹もくさくさ初妹のこら風

人くさくさ初妹もくさくさ初妹のこら風

あつれもくさくさ初妹もくさくさ初妹のこら風

文永元子十月首出歌中一に

毛羽川つらと初妹もくさくさ初妹のこら風

二百首出歌中一

文の六月之つらぬ天の川にむらさきもくさくさ初妹のこら風

もを給へ百を傳ふお中し七夕を

七夕の意おけりてを給ふましる中の潤をぬん

七夕後刻

月よもつましくみせぬ七夕のふもたふんか

妹も此お中し

萩の葉風吹しは高伝て物うつく枯いまより

うそを来浪あつて秋風萩のうそはあふぞれ

萩の葉に風あきしをさつて浪あふぬありな

夕萩とつよふ

以風もあふしはあきん萩のうそ秋の夕暮

秋をせつとみしお中し萩も夕より萩のをそふれ

今くつとほせさを給へ百首し

お中しうつれうこの教をてぬる萩も萩乃上風

もを給へ百首に萩

お中しうつれうこの教をてぬる萩も萩乃上風

お中しうつれ

秋風をうしそいれ萩のうそをさつてつとふれ

萩乃花を

清姫平をうしそいれ萩のうそをさつてつとふれ

萩乃花

あひまゝ入蘇の子に種ふちて煉のほりわを命の端
乃始落

名をいふあさらう系れもすに者れそや人まひくらん
はあひわ百番あくとせを始とて落

ふ子落おほる野へかち衣被もさふ秋風そまぐ
なをせ落し百首よ

あやうの音の子まよれ死落袖とみえて秋風そ吹
和奇ありとて

今よりこの流るも統もあさむしを命を落秋風そあぐ
幕以

夏落うもさくふあせ秋なをく風思ふとまよる様のも
とあゆむ何うのえん世中へわくあ有りれ幕のちまゆ

初秋のもあ蘇れ秋のあつたまあさるるあさるる
幕を

去焼く其日いつともは幕もあさるる秋花映水せり
神をれてあさるるあつたまあさるる秋の死のうちあ

秋花映水とらふとて
いまそふり野の玉川あつたまあさるる秋の秋のみあ

人よあせ落し百首よ
言葉のあつたまあさるるあつたまあさるる秋風そ吹

秋の沙お中

如くきく秋風も成ぬ秋秋の下感あふふ至らん
野鹿

ふもあけふ思ひ梅鹿のきふふおあせひあふ
文永三年十月百首より

ま着るふ野わらふ麻帳もも帰せしこと素を素
人こよよまをばせ給附のイ百首より

波とてつるまゆ風やをりしはまはれ屋又麻の鳴り
百首のほろ合入麻を

あふふはもねくさぬあはれふ麻わくくる秋乃山里
ちを給一玉首より

何事と思ひあふふはせはらひの小登るあふふ
秋神あふ

あふふは危むのちとあふふは思ひあふふと八境
くももあふふまふあふふはあふふの松虫あふ

うたをれ泪を誰かあてふあふふも秋ハ病をうた
あふふあふふをあふふはあふふの秋のつらあふ

三百首はあ中
あふふもあふふはあふふの秋乃あふふ泪あふ

あふふを給一玉首より

あまの葉もあまの影もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も
あまの影もあまの葉もあまの秋もあまの秋の影も

い河舟をうけてと命はるるをうらむる人秋の夕暮
寄くお世のいれもあまうると思ふの中はあはれ夕暮

閑中秋夕

思ふも悔する人のこころをうらむる人秋の夕暮

秋の夕舟中

かゆひさる樹のこゝろあはれし世中秋の夕暮
うらむるも月とあはれし人あはれし人秋の夕暮
涙もあはれし人あはれし人秋の夕暮
うらむるも月とあはれし人あはれし人秋の夕暮
あはれし人あはれし人あはれし人秋の夕暮

文永元年十月十日百首

神のうらむる人あはれし人あはれし人秋の夕暮

瓊玉和歌集卷第五

秋歌下

山月せりよとては海を照す

さしほも^りほふの山はる根らめりこあひてる月を^{らん}照す

十首歌合

みらまよ山の照まきく影すてねわるる秋のよ月

川月せりよとて

すゑるまて貴衣とてぬ天れ川を流るるの秋は秋月

閑居月夜

人らぬ静しおの月影もあてて見くぬ秋風せり

月影照

あぐれも待りぬ妹はるよとてき井月影照る

月前麻

とて川月すまはるる秋風よとて城りつら麻とる

野月

月とすつる人やららん唐國のよ梅とのれ秋のよ月

野月

あぐれも待りぬ妹はるよとてき井月影照る

十首歌合

あぐれも待りぬ妹はるよとてき井月影照る

和歌ありしとこのとも結番一ふゆり

ひり

月見れあはれ秋と恋の心はむねに
うつくしむ成るれ更る東の月れを
ひ秋のじつき
んまは清とさゆ結一 百首り

秋神よいとをせま一思ふとあり
絶すとも涙の流と契りよそ
神よあはれ秋のあはれ

文永元年十月廿百首り

い月あはれと涙の志あ初て月あを
いりて神のあはれ

月の清あはれ中一り

露をぬ袖は月の影あり
こころひそし人とはいふ
秋と恋とをなむ秋のあはれ
月
神あはれ月あはれ
いりて神のあはれ
あはれ秋のあはれ
あはれ秋のあはれ
あはれ秋のあはれ

百番沙あはれ

いりて神のあはれ
あはれ秋のあはれ
あはれ秋のあはれ
あはれ秋のあはれ

二百六十首止あり

宵半の光り空の月影のうらみは光りあはれ

花月五十首あり

秋をさるる秋と人知るの秋風涼とわづらひ

よりの神方深きやうきく曇り方お月影の秋

秋の来れおけつる月影ひらきをみよくはらわと

忘らぬ秋の秋といふまにや未だ月影いさよ

山姥れ夕方や夕陽とあてらぬ秋の月影あはれ

奇合なり秋月といふを紙

秋の来れをうけは涼とあてらぬ月影あはれ

もくせ給へ百首又接衣は

よひけを秋もぬ秋も秋は秋人秋人も秋

五十首止あり

秋の来れ月影あはれとみよくはらわと

秋接衣

河内秋の家とよ未の秋とよは涼れ秋いさよ

曉接衣

秋をさるる秋の秋は秋とよ未の秋とよは涼

二百首止あり

秋をさるる秋の秋は秋とよ未の秋とよは涼

六十首 沙路合

偽のそら 秋風と身うらそら 東あきこれ夜うら洗
百番はあ合に

里あれうらう 涼更志は此野に身天を催う 衣うり洗
人くよと平せう 涼路一 百首なり

かう月れ菊の恒根ぬあきとてうらうひり 燵の目殺の
夕音城

何と好くやうらうらあわぬ 河川音れ 秋の夕光
和音あまし 系と夕音とよ半城

いづよと秋やうらうら音あはれ 系よとあこの日と
三百首は音なり

卯山あはれ 秋の葉とよく夕音よ 初居に 燵風や吹
あはれ 秋風

あはれ 秋風とよく夕音よ 初居に 燵風や吹
秋音

あはれ 秋風とよく夕音よ 初居に 燵風や吹
百首は音なり

涼系れ 里の秋風とよく夕音よ 初居に 燵風や吹
和音あまし

人くよと秋風とよく夕音よ 初居に 燵風や吹

三首首山歌の中

立田山志丸姫三郎の秋風まらう川あふか公るわりま

秋はあま

まらうとるあれたえはひの葉とまらうひの夕と秋

糸酒の香をよめあまのまらうあつたは

山のほろけりらーたはははは

花あー屋ははははあつて又いつの月の香も

んまよほせを給ー百首

あつたは山のお葉のつらてまらう秋をよ

山妹風を

蟬のりくまの指いとまもあははらつる秋風せ

六十首御奇

まらうのまらう秋葉あつてあつたははは

和奇あま

胡あくまらうまらう保山のまらうあつてあ

まらうまらうあつてあつたはははあ

百首あま

秋あまらうまらうあつたはははあ

文永元年十月は百首

あつてあつたはははあつたははあ

二百首は并ぶ

みすよりれ細川山を舟ぬめるまららの紅葉をこころわらわを
なく床のあまの山ををぬるぬる合ふもを
奉らせ給へ百そくお業を

うらぬまして家のこころなる山里のこころをこころ合ふ

久永元年十月は百首と

唐のあまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

昔秋をば

月夜のこころあまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

人ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

秋のこころあまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

九月のあまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

あまの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬるの山ぬる

豫公和歌集卷第六

冬歌

三百首御奇在中に

何れもあふりぬと志合ありき此のまじりたる

初冬の公歌

初あめ秋の海とけりぬを袖とあらはれをけぬえ

秋乃をいふまの光一若葉そそを物も何れも秋の初めを

人へくまふ酒をさそ給へ玉首より

浪平はあまの垣にま衣をけりてくいとひささく海河

秋の初めをさそひまはけり月あめ何れもやうりらる

特選歌

風くわらぬはるをれりすまよのどして何れ時あ

はるまはあはれぬのよひよ風よまかせて降時

物時ぬやまも

さるてをあらうの袖かぬあへの底よる何れ

初奇しあしあとのこも結番うし

たの次

初春月あらしをともも里れあまの初えいんや

玉そ由あゆ

初めは初春の初しとけりしとあらはれあまの初えいん

とこのも影とばかりておよふ春風を
竹を

身のまじい志をくもて表なる見もく世をわびぬらん
まじき結し不首を

とそらるる雲田のよめ木枯し山は志をたれらるじし
初弁を

村西をくんとすもあふまのくんとくしと結糸を月を
落葉を

かた月をたけ竹をたけ山をたけのよめを
次妹は行末くは山月をたけたけとらるたれ

之百首中前中一

志をくしまじいとみたる山月をたけつらて落葉をたけ
菊の咲離や山とくつてくしきあけ枝のたれをたれ
目新は枯のまふとをたけつてくしきあけ枝のたれをたれ
百首中前中一

咲花は子程をくしきあけつて枯むくとのまねをたけ
夕ふ鳥を

梅をくしきあけつてくしきあけつてくしきあけつて
深夜ふ鳥を

梅はよみ子程をくしきあけつてくしきあけつて

和音ありし

風ひよみそをい波のまへり月一ひのよ味ふもつ物
んくふよみせと好結一玉そりし

寫はしひもさりてう海のふらむはれも今も

後泊千鳥

浪のよみはれり此海のまはれとひすそひらりふ

二百首はあり

古のつらふもさりてはれも今も

冬月

さゆり秋を月をさるる之方れ夫の川をわねり

百番御お合をりわり心を

あきらみのさるるつらと秋をてあまみまき月を

を曉月

月こよ霜よれ月をわねり人こつはえりる

くよよ海とさあ結一玉そり

あはれんあよみとさるるてハナを治りよゆら月を

あはれんあよみとさるるてハナを治りよゆら月を

二百六十五首中よ

さえんあはれんあよみとさるるてハナを治りよゆら月を

百首はあり

とて糸あぞみしほふ山さりれいしほしきりきり

玉首はあ合りもあ

いしほしきりきりきりきりきりきりきりきりきり

もく境始一玉首也

いしほしきりきりきりきりきりきりきりきりきり

あはしあはし

流たきて人地さぬ契しと家わすりく庭のふ雪

人との流つさぬへー門うてりことたへんをれきりあ

きりあをりてうぬる我宿ちるひきりする庭のあはれ

玉首はあ合り

あはしきりきりきりきりきりきりきりきりきり

いしほしきりきりきりきりきりきりきりきりきり

池あを今こわしきりきりきりきりきりきりきり

五十首はあ合

あはしきりきりきりきりきりきりきりきりきり

玉首はあ合り

みのふ石波の中山あききりきりきりきりきり

松きり

山よき風をきりきりきりきりきりきりきりきり

初弁あはし

冬ぬきとゆりつじきあはしうらわち燈の光のさしあは
る三百首はあれ申すよ
歳じよおあまふ月はりあふそつめは光とて
の集言

老の坂もこ末きと今うも来れあはは情とあはぬ
いよとん又こころえいさうふたせとさうさて書ぬ
弘長二年あふそまつと給へ百首と

おるいんは

あはれそそのあふ業とさうせはあのやうにふあはれ

瓊玉和奇集卷第七

恋歌上

三百首は歌乃中に恋歌

さあふうのふあふあはれあ思ひのうあふうん
しを給へ玉首と初恋を

恋初らふのうらをつをぬくよまつあまてめく袖飛
入くよとほとさ給へ玉首と

あふいああふあは海をさしあふうらとあふうれ
うらあふのあふあはあふあはあふあふあふあ
和奇集の結番あふあふあふあふあ

次々急めを

思ひてはるのくく一あきらけいよ思ふありの公成り

三百首序の中

思ふ山のれくよたの雲もくあはれひの志のくも

かきつよをそおもふ一と思物に人目とよのあまの

忠急派

あひ海よ知りしそあけき難波のあはれ思ひまよ

河への海まの小船あつるそあひま一あせくやおも

百番御奇合よ何一心を

思ふとらふ家を思れそそあひまあはれあせのねら

五十首北御奇中に

思物まのよくそあまを人目とあはれあはれ

くよよ海をさせ給一あまを

あまを思ふ思物まのよくそあまを人目とあはれ

忠急の心を

人をも思ふ思物の思ひまの思ひまの思ひま

何とく下にはをさつる一思ひまの思ひまの思ひま

百番御奇合よ春急

いよ思ひまの心を人目とあはれあまの思ひま

思ひまの思ひまの思ひまの思ひまの思ひま

妹の恋

はらあはら海とあはる月と恋のおまらも妹のゆかり
恋のこころ

神をよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の
まをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の

木を恋

あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の
あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の

はらあはら海とあはる月と恋のおまらも妹のゆかり
恋のこころ

三首

あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の
あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の

あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の
あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の

あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の
あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の

あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の
あまのこころをよめおのふまよきおれとて思ふおまらも妹の

和音ありて

山もろとのまじりたるまじりてかたや人をまじりて

百番由亦合に君和意と

くくも意とするれ山いふをよめりて糖成を

わは海もそにれおそのくけされを思ひゆよと

公とつらとてめり者といふそららぬ人といふて

玉もあけお合りねを意と

つましれも限りやあるとあめじもなう地獄からけり

涙ゆるり石も松たれはそはほる民意のいふとあま

夕意とりふと

今もあけたよあろりてまゝんとにのり秋の夕ら

人くまよまよとあれ

まゝ人を待とわひぬる偽りらあぬふあこれたれ

まの川意れ公を

いふそよとまのよひそ文もあぬの月もあぬん

待よひくむとらあむじらあむいふよあれこ神と

来ぬ人をいふまそと秋のまきさくは月もあら

いのかまといふか一人のまきさくは月もあら

いのかまといふか一人のまきさくは月もあら

賢名志と

侍人と女とを分ちし備のさく世のさく山崎乃月

三百六十首のあはれ

つひはもねのさく東もれ村のしづか今と蝶を吹

忠信志と

よひのまへ人め志とくさくさくして文とあはれ

懐玉和歌集卷第八

恋歌下

奉らせ給へ百首の初巻志を

かろしあはれとてしづかひのしづかひのしづかひ

恋はあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

百首のあはれ

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

恋のうらを

今もそよめる袖の後にそよめるはれとられ成けれ
くもひさしうらをのちもあまにあれ別をいかにあん
二百首はあは中又

恋後致意

あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
文永元年十月は百首尔

あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ

あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ

恋のうら

あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ
あまそんを中たとし歌一よそは面歌のそてあしよ

三首 三首

三首 三首

いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと

三首 三首

いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと

三首 三首

いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと

三首 三首

いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと

三首 三首

いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと
いかにたつた代もつひに今なき家財れをの秋かき言
更る葉のひらきよも思ふねいつまて人のあはれと

とらひておのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて
三首 浄斎

うららかにあつたれも安んじうららかにあつたれも安んじ
人こゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて

おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて
おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて

うららかにあつたれも安んじうららかにあつたれも安んじ
愛慕とつと事哉

おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて
おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて

うららかにあつたれも安んじうららかにあつたれも安んじ
あつたれも安んじうららかにあつたれも安んじ

おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて
和音ありて結音歎とのこゝろをばはらひて

うららかにあつたれも安んじうららかにあつたれも安んじ
次と

おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて
身の強と思つたれも安んじうららかにあつたれも安んじ

うららかにあつたれも安んじうららかにあつたれも安んじ
百番 浄斎
おのゝこゝろをばはらひておのゝこゝろをばはらひて

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
二十首歌合しとて

急ぎたはつたはつたをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

ゆゑに急ぎとてせしむるは
十首哥合に

とて急ぎとてせしむるは
絶無也といふ事と

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

あはれはるるをいかにぞかきとせしむるは
絶無也といふ事と

瓊玉和歌集卷第九

雜歌上

二百首迄奇歌中

百安や天照神の文粒君うさしは誠さそゆりらん
まをを給一玉首は神徳誠

民やとく國にたまれと方重との又新る公神と志らん
た有り心誠

よ中の中ら此とるまも男山於じふ身とゆせは
此たたまわると夢の由さうかひてそねむじ位吉乃松

位吉乃松の松乃さみと久下乳を非もう人常ん
二ありまうととせ給る付

五戒は出奇の中女不殺生戒
あはじとといふとう一保是れ海もう此公の女を初使

五戒は出奇の中女不殺生戒
う此來乃物海の舞うととそふ此月志新誠守ふ

未法も年毎恒患滅
あんとくももお祭を祭ふ山と神あさこ地を所乃松

け日己色今即衰滅
くらぬこそ言ぬとくら歎れ者さうすら鐘のひらみ

百番沙弥合に釋女を

あひさ記法は法に記法を記すを記法と云ふなり
世に記法ありて記法を記すを記法と云ふなり
旅沖前中

年月の毎に記すを記法と云ふなり
記法を記すを記法と云ふなり
霧中松と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
百番は記法と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
人記法と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
旅宿月と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
旅中と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
霧中と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
海と云ふ事也

記法を記すの末に記すを記法と云ふなり
出と云ふ事也

ももを給へ百首一河成

^後ま今
これにまももを給へ百首一河成

指

今を給へ此指のまももを給へ百首一河成

玉よぬはか合と月一心を

いよせんをこの指のまももを給へ百首一河成

山成

若木まてもゆの思ひ方ある世とあはれ山のまももを給へ百首一河成

人へまももを給へ百首一河成

ゆれ給へまももを給へ百首一河成

卯月のまももを給へ百首一河成

まももを給へ百首一河成

まももを給へ百首一河成

山成
まももを給へ百首一河成

百首一河成

まももを給へ百首一河成

山成

まももを給へ百首一河成

三首一河成

まももを給へ百首一河成

山家去来

山里の山の家は昔はあはれ物よふは志のさるる
位はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山家去来

人のあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ
人のあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山里の家はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山家去来

山里の家はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山里の家はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山家去来

山里の家はあはれ物よふ

山里の家はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山家去来

山里の家はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

山里の家はあはれ物よふ山里の家はあはれ物よふ

續拾遺懐旧三入集に不見

瓊玉和歌集卷第十

雜歌下

三代出龍沖流をり純ら次りくうのま

給を歌

書を多読んくしひいひのわした代い志のふは

なまを給し百首を懐舊

和れ浦やあらむくあうくまふ人のまけと愁のひつ

六指歌をほりてそのことをも奇しう人な侍

くさ次りく云紫

ふ記つらふとの業もくハ何とく志の智昔れくまのいん

五

らと身となさふくとそと代まよふ志のくも時其造り

述懐

らと身れうひやうらん必ち為民のこまよとなくくさハ

公とびりくくおとれんてせれあよのこ身とやまうせん

ら流はまをくくさうくわらくさうくやせゆらまの

うつり月まててうれとあはけし満は只れをるりくわ

んくは孩をくを給し必まう

世よれうれと志くくくわれを名をつてく家も世危

題まうん

あはれさうしほふくくさつらと志はるはかへりうらな
 山すくも海んとまていおげれも事志けいふはもとよお交わ
 有徳のふりこひてかへりおまじりおのちのちうかへん
 うらあふいおまじり後とちうあふとくふおまじりすうん
 述懐サ首由あり

うらも入家男あさうらあもくれ世のとらにあらうく
 なすいこせよのちとちあぬふは治よおなとておしこい洗
 世中れうらもいふ笑もはあといふは様とほりうん
 されよいおあふのこまる後うらに名あふゆとあふう
 別てなふ人あふこれまじりと誰とさ山りあせおしん

にあり十首由あり
 世を捨らあまを笑ふ人いひひりうら山の道と志あふ
 いちひこも後といふと思ふこえは世もあふあふりひま
 文永えひ十月玉首由新れ中あり
 常れゆらけ舟の世中まよふりこわひさうらあふらあ

百首抄新合

あふいこいこいよれ中とあふりあふらあふとあふら
 新由おちあり

世のうらと思ひつゝ今夕あふらあふらうらうら山
 といひともいひこいこいこいこいこいこいこいこいこい

以末平持とあり此方よりいふに
 よの中にふかしくいふもいふに
 男の為よりいふとあるのみなり
 世中とありて教くともいふに
 和奇不れ結妻ふと此とも續く
 次

世中れうらしかきといふに
 心氣と浮世中波かつていふに

五十首抄前中

いふにいふにいふにいふに

百首由あふり

後の世はけしれ為れ我方のあふ
 速懐のつれ

速懐のつれ

此ら方へいふにいふに
 せよかくいふにいふに

二百首由あふり
 後のうらにいふにいふに

二百首由あふり

うらもいふにいふに
 難は奇れゆに

後六首あり又いふに
 難は奇れゆに

難は奇れゆに

後六首あり又いふに
 難は奇れゆに

こころをなげきしるは春のふたねのうらみはなほなほをば
人かよふ世をさそひて一白さそひ

いふかたは思ふにあらむとてなほさそひて六世さうらふ
あまのまにまにさそひて

ふれ中へはさふあまの深きものなるもこゝろぬれぬ
糸浦院あ仙む門院法事うらなはる

なほさそひてさそひては月と水鏡して
なほ人か教はまらる世中試いふなほと月もさそひ

なほさそひては月と水鏡して
なほ人か教はまらる世中試いふなほと月もさそひ
人かさうたはさそひと水鏡して

ふれ文物なりなりと雲深き味ぬれは下宿の梅さそひ
去年冬時教へた月満ちてことごと

ては秋長時なり極なりと思はて
なほさそひては月と水鏡して

なほさそひては月と水鏡して
なほ人か教はまらる世中試いふなほと月もさそひ

なほさそひては月と水鏡して
なほ人か教はまらる世中試いふなほと月もさそひ

なほさそひては月と水鏡して
なほ人か教はまらる世中試いふなほと月もさそひ

中とつてふくまふに別のさまふのたつとつて世よふひの
 あふふのふつとれは絶てて終まつてふ方代まつて目
 人へつてふふとあはれ玉まつて
 おはふふの代は六折ぬたふはひをかりて和奇は備
 百番はあふふの終のうへはひ
 義代はふふのうへはひのたつとつて世よふひの
 文永元年大嘗會に河津と終つて
 すらふは徳の山は松原とつてやあはれふふ
 文永元年十二月九日奉御書親撰之
 文永元年十二月九日奉御書親撰之
 文永元年十二月九日奉御書親撰之

文永元年十二月九日奉御書親撰之

文永元年十二月九日奉御書親撰之

和奇はうら風

此冊者以 禁中御禮奉留写畢



慶長三年二月日

左少将基任

